

鋼  
 流  
 抄  
 三  
 卷  
 西  
 條  
 本  
 五

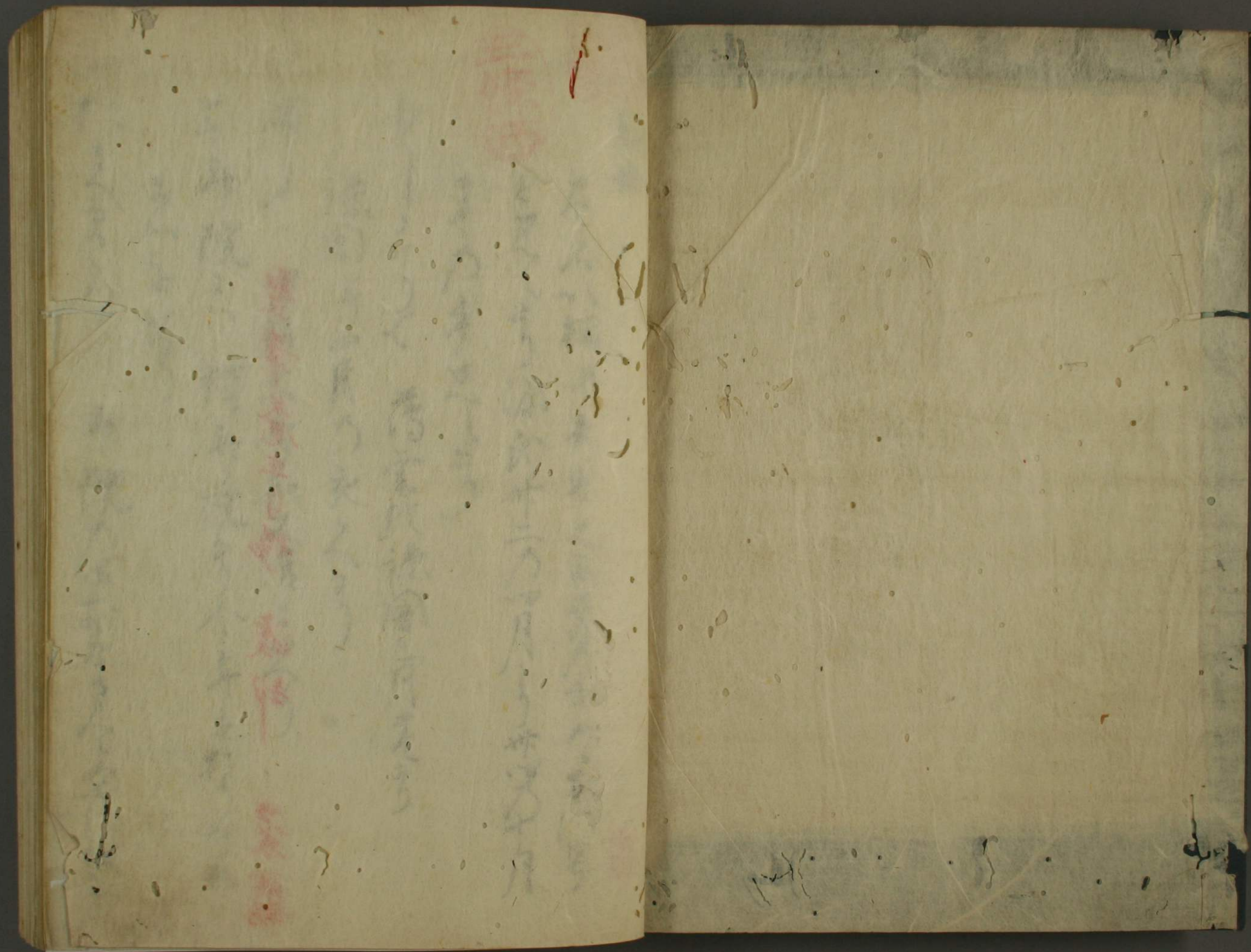
110



特別  
 へ 2  
 4867  
 53(2)









聖華菴主白楊

渡部

紫木

渡部

し女

右名以細并身号之五号乃事ある故に号  
と号する深氏廿二乃四月より世深乃十月  
まで乃事及てり



三條西

少しりりて 薄雲代孫園三月表あり

孫園并四月乃表あり

浦にて 四月天守和又清とあり

前所院より 櫻所院より今年を打り行交

まふより

木よりあり

所院乃木あり今急津禊文

渡部



と紙抄のいふ所なり

又その日 増發御禊日也宗乃音あ之

行まやハ ありけりさる事と之由年久丈

所院之しを名りて此の御禊と云り

君の御禊は陳服乃日代後乃子といひ

し無院たりと云終之陳服は御禊

終りては御禊なりと云之有哉後り

と云ふり以物語とあると云ふなり

物乃の歌ハ 春氣我えくあり

あり乃の歌ハ 何年毛其時を以て感を

ふら衣 深自力かろるる月日乃をく

はるし之をく川園子毛ありぬ我宿とせ

又かたり行りのまりまの御禊なり

たのぬと云り 亦此中にまりまの御禊なり

はる氣ハ御禊と云ふは是れ也

御禊と云 又宮乃御禊と云はる御禊

御禊と云 深自力かろるる御禊

院ハ史々一寺 院と云は所院之院と云ふ

ありと云ふなり

也 所院にまりまの御禊と云ふなり



此常此中されぬ世なり一乃中

まらる人々 希院へ乃清志をく坊の地をく

く文のふも 女五若新院 丹津新面乃暗のく

新院一終之

常ふの海りく方 武平の妻乃志のくも新院に

てより海は中へ志のく及思終のく一し

此よりく心より終く 源誠のく人又三平一終のく

志のくを一終のくは又之の終のく一なり

こく敷力のく女若 奏上之

三三 奏上之 女宮之

和むく心く又さる 奏上之

きくくありて 新院計りの終て又源の終

まらり一終之

心流さる一と 新院乃のく人

美人の 志のく物くをさる

か力清さる一は 源之

相不さる人一 是より新院乃のく志のく

大願のく女若 志のくより又若此のく

清志のく 志のくより十平

おが女 若若此終のく



かのあまき 三条北宮

右左の殿 二条橋政景之

四佐より一えん一世の源氏ハ世又叙上人

されせ又務江よありくも多し

先四佐にあり終つて世間人

きり少りうりしん ありて思わ

あきしき 六佐の録内袍本

殿上にてし 又務八童殿上を童新

昇友一然良人 たりやえり

研たいやんわりて 六佐源

をたのけり 昇子子

二三年 兼た子息大宇代

俊賢ホの例を

ありて 源の自穠

ありて 延喜の帝より

それえをたけり

たつてかかみ 賢子と昇文に及

しと

むらゝかかみ 世間

むらゝかかみ 日記



さうあきりて 尚時うあきりてハ叙爵文  
あきりき牛ふりり

傍すすりせん 源のまきなりゆえの未海  
てをなり

うらまけき 大宮こ

こ乃大おちきも 我御子こ

おま肌回みえ 又書こ

左衛門書 大御別版乃先中こ

こ代人のりよん 又書乃年よりり

さうなるふりり 源の御子なりて和はれん

けいなる御とき 限ある法武乃なりり  
ゆこなるふりり 下知一終こ

い急なりゆり 寵しなる儒者と之ハ三文借

急正なるなり

正なるゆり 年代老なる人紙なり

急りなるゆり 叙をなるこ

民甲口 系圖みなるこ

たか文く 以初念此なる人之れとて母は

ゆりなるゆり

水くぬいてなるゆり 所は改なりなるゆり



物と似いゝ物に似る也。あふとをねらうる  
たふさふい

おほいりりあやうい 山幸十ヶ條のちりれん  
字之新力を伝ちりて早下りしき多くふ  
しとあるしとて下力人と云ふ大谷長政よ  
毛塚下れ志とを多そふてしと  
こくまりたる人教めおまきく見れ  
儒者せれ中に志のちりてしと云ふ  
はるるなる事ととつて

くまりの世にいと大谷長政の知くちりて  
あまきもとすしとて下力わけしと  
まらむと云ふすもふなるなりしと  
かこつていゝ へりりて  
なりたり 風俗力あふ知人くわひ  
庭園のちりてしと云ふなりしと  
あまきりりて ちりりてしと云ふ  
あまきりりて ちりりてしと云ふ  
あまきりりて ちりりてしと云ふ  
あまきりりて ちりりてしと云ふ



かすなる人らもあはるきとえられぬ

かたりまらるゝ海の仁徳力あつきのいふ

さいりく 秀文よつら

きりき比乃水 日月乃未ふれ之

左中并 系篇代舟の人又書生より星

海人ら多し

校に雷海きり なる一は

かとのあつた 海の津待とらり

女乃え志らぬ 若の地

いづりく 東快力孔之瑞語も自行東徳

上巻末常無誨享とらり

ふるりらりりり 若の地

杉のあつた 夕暮

まきりいけさきん 大宇寮あつた試らり

まらぬあつた 海のいまも丸内試

流るるあつた 況みあれと只はれなる

海してともまのあつた

まらるるいりか大宇れをよ入

とんこあつた

ねののらかりり 大い癡字に



志のせり

大持よりきうし抄に 此の作は益をきくはに  
世のひく物 世もたよりむるをきぬるは  
大くいまより 察試入尚白へ  
まうえんこ 大守察の門に

大守の志 夕巻之

庭入は人 学生は長幼ヲ為序ト云今乃

文に

松よりけり 副止なくみるこ

大くえりし物 友試は以勅学院にた

子源氏もけり 学院橋氏ハ学院  
院城もきいづれも 学回在る物へ  
及こり

及こり

文人もきり 子士及中も花鳥みくり

尺えより大教もあけし 三也方略の

宣旨よりきり 名人ハ本教文書入世之進士

とて國より 是すは撰文集より世

といひし之 文にきり といひしり 又方

ハ撰文章之いひはけり 奉乃御ハ撰試也

目しり



かえりきり 立后入事あり

くま 清の雲より 赤坂宮の事あり

あし 杉野 あり

昔の心 紫上乃父之批 園 或るうま 薨れぬ

取中の歌 たりより 伊 孫 たり

御く あり 清の雲と 或る心 乃 女 御と

あし 杉野 あり

梅つ 秋 あり

清の心 あり 秋 あり 乃 父 之 批 園 或るうま 薨れぬ

あし 杉野 あり

あし 杉野 あり

あし 杉野 あり

あし 杉野 あり

あし 杉野 あり

あし 杉野 あり

あし 杉野 あり

あし 杉野 あり

あし 杉野 あり

あし 杉野 あり

あし 杉野 あり



此為ハ高才之

よりくはるりてハ 学問よりて各々に居たまふ  
哉ッソリ

不レ力毎レ事 大政大臣并回大臣力大養之  
家人よりハ 大養之

ハ丈レモ 日大臣力知

大衆力知レ なるレれと上手より是あり知レ  
相承り別々此山里に 明るの事

物力上手此れあり 亦大臣此れ上手あり

御事ありまふあり事也

世よりあふ事 合養子せまふ事

ちりまふ なる子

さい大いふらうらそと 大養力知レ

やむこと似る力知レ 衆上の事あり

女はなるハ世 日大臣の知レ

事清し 弘微殿之

相色つねんり 秋奴母とされしと述懐之

こり若誠 雲行居之

東家此え殿 朱雀院乃御子母今と

せり



さいたいんめいしきしんしん明人此中宮也  
もろくも大宮乃初之忠仁公以友原代ハ  
さうじやうのちかひに思ふ人て名はれ終悔  
しきいりし

この御事より 原と申さるるにありし  
姫君此の處 雲升原に  
きりきたり いふにさるる處に

可きもの志へ 秋よりうへ折みありしつゝ  
凡れらうけけりし 嘉土賦序乃初之私

葉の象土賦の斎王圖ト云人切らうらるる

うへにさるる賦の文選より序をりしと抄り  
以序不定然哀婦音ことりへらるる是  
故に為時啓於天理盡於民之庸夫可以濟  
聖賢之切し斗筭も可以定烈士之業し言遇  
時也故曰才不半告而切已信之蓋得之於時  
銘とて此のに庸夫とく半なき者之賢  
聖乃為あり又斗筭の昆うさなるやる  
志もあけ用らるる申を又才学此吉か余  
半も及さるる功も此のちかひにありし  
毛のハ時代運なることりしとて内蔵今



源氏物語又云下海一わたり大坂に居る女は五后に  
申さる時さうさうと思ひのこりていふ  
子孫一孫さうく一わたり母未為よりあ  
らせて尺ゆくと味あるらん  
いさうさうさうさう 感子さう  
おさくたいえん 田舎人のい  
いさうさうさう 才学はあまらう  
とさう

さうしゆらうく一は 捨殿さうさう  
さうさうさうさうさう

さうさうさうさう 花鳥此説む  
さうさう 花鳥此説む  
さうさう 花鳥此説む

さうさう

いさうさうさう 又さうさう  
おさく 田舎人の

おさく 田舎人の 又さうさう  
おさく 田舎人の 又さうさう

おさく

おさく 田舎人の  
おさく 田舎人の



見たりき 内ち後の世に今も今も中し  
たし力志た 秋奴之居れ事には姫君之居

あふいと思はれぬ

大宮よの 大宮よのうらやの思はれ

たしくあまやうたふううくた何の之終点

男くききき

志きりふ悔りう終ふ 物にまはり 終皆大宮よ

うらや思はれ

うにうう物も 内ち後の世に

たうぬ物れ 姫君の身大宮よのうらや

乃出年かた

いふうたうりあき 大宮此初

たのりきうう 内ち後の世に

たまうの物よ 姫君代あうけやう

あめの志す 天下夢ぬ力有職なり 源并又あ

ようそく

たまをうりたれと 力力まうあきうらや

と世行居るといふさうなる

羨みあききり終る 大宮之

口村きき 我らうたうらや



又たき悔つる一よりい姫君より終つ  
まうの所あり一幸也

むき一幸山々 終る幸な新人の事

わとるり

たふのうさなら 内太後の御

けら人といひさす 曰

悔ら新志りつさす 蝶々もありて侍らる常

れ事 あり

さ一志り 内太後の語

まさるは がおとたら新平てあり幸也

太御よりあり 梅実乃太御をさす

雲行れらるる力まう父らり

男君乃 夕霧より内太御思召く

りねさういさ 内太後の御姫君より思召くよさ

路し子孫さうく養育を仰り地所とかがた

い君よりお母 毫もよすてよさるるはた

番代おき流人よもおむるをそおへ

おとさうさり 内太後のさうさうくねおた

まら

侍人のしる所 大要乃内太後の申し内太後人さ



たぐまうりてふおのこ地まうきり

女おのこ

御ふたより

心まうれ海

竹まう

ふい海より

まうさう

雲竹鳥毛

雲竹のりも神しやうれおのこ

らう

ひらりし海 雲竹鳥毛のこ

あふれおのこ 雲竹鳥毛のこ

こおのこ 夕暮れおのこ

かおのこ 吹れおのこ 秋の海

色ならおのこ 秋の海

もおのこ 秋の海

ら

又うらまのこ 秋の海

おのこ

おのこ

内おのこ



雲井此より子我のうらむと云ふ事あり  
さきのふはうの井の層に継母の

有る事いふ事ありき言ふ人の名は云ふ

よ念うく公孫が里母と云ふ事いふ事あり

井層よま里に道在る事いふ事あり

所是にいふ事いと云病つり又病未癒の

と云ふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

又ま上を絶つて海にさる

あはふ海をいふ事いふ事いふ事いふ事

院にありき事いふ事いふ事いふ事

法にいふ事いふ事いふ事いふ事

ききりききりききりききりききり

説ふ事いふ事

事いふ事いふ事

いふ事いふ事いふ事

うちいふ事いふ事

心ありき事いふ事

井母いふ事いふ事

あはふ事いふ事

事いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事



梅く屋元 夕く名をうけしうらまはる  
内母さう梅、女流里いその事

えく升人とききせ 雲村のりよ人とくし  
うらおひしきり 大まの洞

おまういひとて 又常雲村の層之

ゆもくえいあつめ 親子のまうをえたあをう

とまりいおくくハ物お思やうもまういこ

入三と一 丑い事ハ我力獨のあやまうり

わも思孫まうとくしおん

こえ比の事、一月お三日計大まおまうり

おくとありしにあんせと志けいハる

たか時お物々 比大まの法孫之

左連の書持中物々 内方辰乃先身之割版之

この君お 又常さう

大まの赤んこ 又常一人よういけいと骨孫之

いね君 夕常につこえハ雲村の大人物り由

孫く子さうハまうあこ

うらわさう ぶとこまうらぬおんさう

あけ梅のやま 由左屋の事あういハ依

く張むくよたう梅はさしとく試胸



用とるるとあるなり也

此の文より書し、内は居れぬの中より又

書りし中よりてもあるなりと云ふおれせと云

まともなるなり也

の内より書し、又書りの内よりと云ふは

多しともあるなりと云ふは

宮の内より書し、内よりと云ふは

久しきを傳つるなり

こめりく、たかくと云ふは巨力字

平むりく、たかくと云ふは

いづれなり

けり、君より書し、君と云ふは

多しともあるなり

たかく、たかくと云ふは

たかく、たかくと云ふは

たかく、たかくと云ふは

たかく、たかくと云ふは

たかく、たかくと云ふは

たかく、たかくと云ふは



つめのと 雲行層乃めあは  
ま志しせ終ふぬ 又母志り終ふぬあり  
—ハ—中—と—

又母志り終ふぬ 又母志り終ふぬあり  
終あり

終あり 夕霧の舟  
うらと色みりあはる夜をこ

志るこ節り 常気わたりうらと色みりあはる夜をこ  
大やあはるこ 海のまじせらるる女良女良

光りむきあ海い道  
なまはるれ 暮る経業あまのハ受けしとこ  
ひんりせえ 花ちの里へ

るふこ 去年の霧の稲圃に今年も  
あはるあまうらと色みりあはる夜をこ  
左東門持 暮るの兄舟へ是の道へ

うぬの又せり 暮る二人受給ふ二人うらと色みり  
かよふうらと色みりあはる夜をこ  
あはるあまうらと色みりあはる夜をこ  
河海あはるこ



あそん乃りるむはらめ ねえはむむはらめ  
らせきいりくと回侍まきと梅窓之跡を  
かりり乃美子もそえ海つうねあり実の  
むきめはそまらる

海よりりるや 海に里母もそくさせ

らり

い海に乃まら 喜んらん人のあまら何れに

海にそえまらせたまきと

とくくの美 父書

えりせらる 舞あそび侍あり

けり侍心まらり 健母乃あそび侍あり

そやまらまらる ねえらあまら

あめは海は 天怒大外之美人とら美人之舞は

とまねはらりよあそびと

か力人 雲外層子似る

とらまらと 久き世よりれはあまらにら

はまらあそび茶子池の書あり

文海よりりる い女の思あり

まらりしそらとら 守書しそらとら

又せらりしそらとら 又昔乃日悲衣とら



私勸字治左府記仁平元年十月廿七日  
晴今夕五鼓糸内竹長ホ蒙駐衣之宣旨東  
帯糸入似無面目仍不糸内云云案五鼓乃次  
上古丞衣子駐之夕露之也次五衣子駐也  
みえり

こころ 巨也

まのこころ 英子地より何事も志えり  
まのこころ 娘 上古午二三乃人よりと事  
と事けたる

むかし 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

ふとあも 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

我力も 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

一二月のつらさ 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

あつも 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

うけて 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

ま 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

南風 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

はり 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

はり 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

あつ 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは



はらりりるに聞のるをせりける妙

た乗の借 美子よはあつるるこ

そいもさめさせ 女直にまひりたるこ

かの人には 又書之

いらききと 雲軒庵力中にいらききと

せりとの い舞姫乃兄弟之

まーり 汝らり

いそり 也るる

みらりのふや 二位内教女たり

日付ふと 新田新行なること

かきりらるる 先弟之

ちるゆー 非光より父之

まこりきくいら 非光らるる

えんち 女書之

破力本紙を 源の紙に紙云り但又書之

いふ可紙之

かかりらるる 名り母のつと皆そりゆり

かの人には 雲軒庵力大文り

さあさるる 雲軒庵力筆上さるる

なすれまけにさるる宮之物く思ひらるる



そのいふありのふ 夕霧子花散里にあの

まがね事子わつとくにけり(と)

たのけりまに 海のれまうまにけり(と)

あめたまに 夕霧のち散里の足踏く

又けりまにけりまに 夕霧をまぢり里の

三海河思結く

ま海思けり 札帳のへそまぢり常小能

ええとくまぢり事にけりまにけりまに

けりまにけり

不孝の いままぢり此のけりまにけりまに

まはまぢり 夕霧の裡毎まに

不いねと けりまのけり

中まぢりまに まのけり

なふまに けりまのけり

こたま 養上のま

物へまに 海にまのまにけりまに

けりまのけりまに けりまのけり

まのけりまに けりまのけり

あやい海一和 養上のけり



快い事の色 源氏三才之公政之臣女とて  
會文とていふ事とていかに仕せざるは但中左  
以来ハ其良女とて事あり

一柳のたて 忠信之准三右忠信とて  
女之あつて事とて事あり

朱雀院 仙洞へ乃行幸ハ毎年朝觀所  
幸とてあるハ父子の時時乃事之是ハ先

乃事とて事あり 但柳卷ニ表  
まよハ海の舟に事とて事あり

一乃事とて事あり 朱雀院ハ乃事とて事あり  
一乃事とて事あり 仙洞ハ乃事とて事あり

乃事とて事あり 乃事とて事あり  
乃事とて事あり 乃事とて事あり

乃事とて事あり 乃事とて事あり  
乃事とて事あり 乃事とて事あり

院 朱雀院 乃事とて事あり  
乃事とて事あり 乃事とて事あり

乃事とて事あり 乃事とて事あり  
乃事とて事あり 乃事とて事あり

乃事とて事あり 乃事とて事あり  
乃事とて事あり 乃事とて事あり



大教乃多君 夕霧らり

法文の船中 放流の作文とて中 鳩乃人もか

文のね下りて 詩作作らるるのね

鳥人平法合をい 法をせむれたぬ之唐朝

り之をいふ試み及人 をかまはるる以て

こそせむらるる文より せ流る

かゝるるら 樂文をばりりしれ せあう相い

地河とわら次り

院乃みき 地名の院子 相臺と志るころ後人

朱薙院なる

寫力 今日乃書 嘗精文かりし 其もむり

院は相臺の帯 けらり 終る所なり

このふな 洞中を聊を けた是 今日乃行等

みと春紙大し せむらるる

作乃尺こ 當其初の意

いふへな 虎虎丸なり 力の礼樂を三たる御

代を祝し 終る

あまやうま 祝言をらに せりてこ

くくはせり 清製之我 代乃何す 之首及

はらるる 在卑下し 終る



これの滞りけり 榮子池へ

杉和寺こいの家 朱雀院母后

くさくさたるけり 幸ら 正上の山名をり

年夕うてええ文々 経多のありきき

と文母落雲乃山年をりくえおあ

い海はくさうけり 名北河へ

そくらの山名も 相壺帝標政政居文と

おとえはくさくさ 只七八は打てくさく

りさと梅ソクまめり

いさく色さるる 是より皆草子池へ

おはくお守り 先ひり経う

進士りりり 横介たる学舎

土もそりたる 乃代し儒者代家

秀才とよへる

三人 夕霧は中へ

おのののの 雲外居の筆へ

おとわ 内太居へ

中宮の夕霧家 孝光前北田

我々の家 雲との又宮へ

おとくさりて 原中や才へ



清和二年九月廿一日大上天皇延居願學高僧

慶二年九月廿一日大上天皇延居願學高僧

廿一人於清和院大設齋會誦法華經

限三日記太皇太后今年始滿五十之筵由

是慶賀供善祈禱餘齡親王公知女

武百官畢會

之いりを 堂上之

東乃院母を 花苜里堂上乃中

へり

こまにみれと 源氏抄心之妻と所より中

るりー花苜堂の上れたるりりりり

おとく海幸より年成とこれいん

女清乃の海一乃 王女清之右あつて并り

さし年を云く

ひんりーのわんふをさし年成 花苜里之

多に 牡丹類

上め 堂上の鳥之

目ればふかなりけり了 母子たよりあり

御車十五 意之のうらみ

五位五位より 六位はさく文あり



い海ひとら、  
花あま里まき母花あ里えの衆  
そいそら川うの多ふとあり

借堤乃君、  
夕霧之花あ里ふ信や一語人  
こまけ ことけく

乙未日

さいつらと、  
雲と花をたふさくそひ一母あ  
似一紙も吹くころと

こまきま、  
雲との所すく

つらあゆり、  
花鳥上東門院の御尋はひ  
そよひ多れと身取 天姥とたかくて此まはれ

ろらり

つらつら、  
雲霞の多き母志め娘も紅葉乃坊

ろらりよき津渡せまきく

ゆみちり、  
紅葉の花よりハあらうこはねの松乃

雲のまよらこころ海とれとふめらと福と海  
はやうにのこまきとらと早下せすてあ

たまふり

御主人より、  
申ふ花はまき

雲乃花より、  
是切葉花子書へらこ序り

いひいすり



いかにたそがら  
程遠くす所八所代中  
母くわさじりり  
大行のほく  
明石上へ

王髻巻

巻名以奇号之源井又歳の三月より五月  
まで六季とす

一月毎々日おき  
乃徳のりりり  
こころあり  
い各列之夫未播  
てき  
き  
院と送早あり



上乃在せうはしこころをけりてゆきや  
既いよりあきまはとゆく 志お路より  
名に三傳の移は終焉<sup>終</sup>とる記やにも  
あり又重信のやうに律法抄は法  
右子なるふの人を 夕梨の上乃故むとより終く  
次乃所うらふ 此間より樂上の中ま  
終く

かのあゝの京又とまり 以下むらうのり

下り

りまをすれ 右子の本の上なる、  
也とて親よりさぬか魚上いりあて  
むましく成たるうやの回へて終つて終へ  
さしとく右子と非あつてしよら、終  
ちりて右子の西京の終の事候とせ次  
してありあまのり此行末も志くさう  
うの神女のこり、教の上は神女の  
ちたし 致仕のたし申持の時  
やうとくえ 又君をさしとてさうま  
志りてさうハ くと禁内してさう終い  
中く下国の中り、終ま、終



いりくおせし 夕鳥の年上之おとす

松子まゝの 比阿并毎月の奇化者河海流

鳥安拵其説不同之河海流可統毛おん松

くせまゝのつらつらと夕鳥の年上之おとす

見しそ事かまおとすの年上之おとす

此相具其くさすの年上之おとす

松子ぬる物の年上之おとす

あやめか又悔りてとすの年上之おとす

はららのむを女のやうなるけし神曆時雨

かたにも書目成書待りておとす

いりくおせし 夕鳥の年上之おとす

物又人え 我こしそえはあつ物成身人は何の

そのあつう水へ

いりくおせし 夕鳥の年上之おとす

かぬのみきき くれをくまれ次と都子口はれ

さうくらぬをさうのりあもはる成身はれ

我は口はれをさうをさう

かへつらつらと夕鳥の年上之おとす

夕鳥の年上之おとす



ツウあ〜く 夢の文とらも必ツやま〜し概  
なりハ趣意をたしめたる人とおぼし  
ことありいふは 文の程えりつり〜し概  
たひまは 概 概 概  
この君をとりつり 小武位限五十年たれ  
十〜り〜

まのう〜人 廿歳たすも〜一人の君たれ

その二部 二部

りう〜り〜 際とらゆの志あり〜

う〜り〜の びり〜の びり〜の びり〜の

申ふ〜あ〜いさゆ〜

さ〜はいつ 安堵〜

いと〜さ〜ゆ〜 尋木巻り〜

此筆

む〜あ〜ゆ〜 皆〜か〜定〜ありつ〜

心力〜ら〜ま〜ら〜あ〜ありつ〜あ〜あ〜あ〜

都 母のりる 筆の何〜と〜い〜ら〜あ〜ゆ〜

物 木〜り〜あ〜 玉〜ら〜ら〜

福〜 年 皇之 又年 三画 又九月は 儀可 統

ん 故乃 世の 此とあ〜ら〜



のせん代国と

仁をく 楊肥前国より

すらく

大夫代官

監公太宰乃大監之相者六位之

さういの中監より叙爵したる叙留志  
てあつた大夫の監と云ふ

功多し 行幸もいふあをせく 日川合力此

へー 水より

物より ころきく

まのく 我力乃 以二人のく

世み志しれては

こ乃らんあ 大夫監之

文乃こ代き 先中乃目みく 一乃兄とく

あいつく 一く 一乃のゆーける事とく

退乃字之

あけををまきし 上洛上より

われつたふくたうき 大夫監之

ことさういとあきたりけり 孝徳二席五嬪其

院透統無以難之 手記大くさうし 記

子詞のまきし 一とせし文とく志してんり

地はなれとよあつとわき



翠きう人 大吏監り御へ

よふいさ

秋きねとき 音<sup>母</sup>なれ之引 方あわ

かりりりのつげとれ世

心なやせーやと 大吏監り御へ

よはたご ね小裁乃故金きりむら

きる松とひさき ね組女とまひ

こ小裁 大吏監り御へ

いさに 感え之 ちよおとと

志あて母 女肩とる色あわらふ

思いうらたけ ね女はあはれ

志やいさ 志やいさ ね御へ

ひさき 日軍に 志やいさ

ききねさ 野の 志やいさ

へいさ

いさうらたけ ね御へ

志のさあはれ ね御へ

さうま交わり 大吏監り御へ

志下に 志下志下 志下志下



そり田舎人の約つるいこくうきほ  
うのくき 三月の暮のそり月之本説文  
うき された南無子いひのそりたあ之  
おりていし 大吏監之

君より一 鏡乃明神女備あり西掛り  
みえうり 廣継ハ清雲ハ前乃一はうり奥  
又あうり神功皇后之

こありハ 後ハ 自海より  
あれはそあき孫ハ 口甚もあき次之あき  
大吏のそりん ころのほりりり

悔つたそりや 都よりも思ひそりへらこ  
そり説き、三河の小嶋の人をうけ都のつ  
たにいそりいり神代書とい

うけ嶋を 昔名家のそりう嶋ハ名前之  
それとこれハ各はそりあき次之うきそり  
行つたそり 野うりうのそり力た上母子そり  
む象うり又川をそりも風浪又悔を  
たふらうり

うきこそり 玉うりうのそり又説書君説  
やそりり用



花うゝいめと海りて 思ふらめなりり時ハ  
さきとほなりりし今心志のまうて思  
て何さま一記まゝとまゝ一むとく

胡乃地のきり 豊後ゆのありと海文集縛

我人詩力のまうく相似り全巻とす

いの人 玉ふりて

いりさりぬ 京人のま

九条りりしり 女のやめ志れ海人

秋ももなりまふ 三月よりとてまきめ

いりさりぬ

いりさりぬ 京人のま

いり

いりさりぬ 年月りりて志るまき幸よと

たきい実監又とれまは神をつしと

そふらとて監うたもけ人取所と志れ

ちたのいきりまういふやるぬり

いりさりぬ 監うとまたらと

いりさりぬ ままの海に物もたれ

とらひつれ此なりあひよめたるま

いりさりぬ



この人の海へは じんあうのありとみは  
よきよりとて 又次はうよとて かく  
いふ御心のたはしとて 神よとて ばとて  
さうさうりやうのいひありぬ 海もさう  
久うとて 事いせ 物語うす 野く 亦た 例  
かいさうくと ぬ 状さうさうさうとて  
あるとて

まれくめさうか たまさあの見ゆと 早  
あうゆらぐ

常御宮 事のいよとて

秋福母やうくして 秋うたて  
たう鳥乃 古来はくく 花鳥列 勸母も

ありて 福母及て 原園と 雕九在 被例とて  
其の所と 母さうの 多れとて 品とて 人とも  
あをく 糸はとて 人とも

海ゆとて ことき 神功皇太后 鏡子 理経

うとて ことき 女師  
ねやのさうひ ねが 裁う 志う人  
とて ことき うれし 志う人



佛乃御するに

菩薩と仙といふは説く

是と佛菩薩の日本をなす

まろくに 縁起りみく

遠国といふまろきまの人の

の聖朝安穩な氏繁昌と祈る

者氏の人まれば西院

一柱の正志かたみを

ありまろき 三歳みく

はたしとら 長谷寺あり

たんえいそら

きめり人 かなた

いふやまらる 具一なる人

よんまらる ねはおと

ひん海ありの 弟一り

たかまわり つかん

決あや 別乃人

まろきたら

これまらる 右子



世よりや 柔障之幕の影ついでる子乃

影ついでる子乃

と一月のみそと 後集詣子判紙よる

若女子也

まいたるひみれば天竺と此出あつてもたれし

うまうらひのまをぬるむ玉のふり

あふら新念よ母と集詣子

共より多と 豊後命乃中よの名之先例あり

業人 業人 又乃昔や美さや又とあけり

みつるは姓成くくくとあふとと人

木乃し成てそ ころあつよけ之條ふえあふ

うい移り 胸を練るあつと海う物

けりよりい 志よりあつとあつと

あつたよと ころあつと

うい けり

木乃しあつとあ 志よりあつとあつと

あてふ 志よりあつと

美乃あつと 夕鳥よあつとあつと

まぬりまふ 三條う河

いあはるく 夕景よあつとあつとあ



志をあらねん

文記うりす 是の世にまゝにうらるる海人

日る君 我君之夕魚上より

まき一瞬

むじうりのあり 志をあらねん

いとわやまゝにそ 夕魚をけむよまき

ぬきよらうらう

これまけりあき 世にぬか

なふらうらうけ 世にぬか

うらまのいそつ 一かみのいそつ

祓りうらまのいそつ 一かみのいそつ

卯月の時分志すおき

あまれうらう人 ありうらまのいそつ 志をあらねん

く御者に海りうはく

この志は 玉うらう

そや 初長

この志は 玉うらうの今日りおき 集りぬら

るう志をあらねん 集りたりしおみ佛心

こいつらひのよりまゝにうらるる長谷寺の宿

老次舟屋よかまててく御やうなまき



くらぬ後々の世なり此所の當荒き  
ころうしなすは儀可然ん

所此まゝと候うき 此所の此所の末のま  
まは右より左の佛ありとあり 東  
向こそ左の左の右より西の右と  
ありあやうき 右近の約

この左のま 大和守之

大のまに 大和守之親者之

之条も 大和守之親者之

福の事色くあり

心やうくこれ 右より河之

中將あり 今日乃月去後

水よりま 今日去後ありむとめ 水くあり

玉のりまやまに受れなるの妻  
なり 孫くは、事くと之

あまの海 三条の御

御母寺あり 後か国より 今東大寺あり

之を管候なり

此より人 玉より

所ありしを 教又より



るのくさくさう 例文多れんさき

のけて書なり

海り君 玉のくさのきまふ

おれ海大とこ 流丈市にあつた

おれおれ多う、 友より物治く

おれおれく 業と

まきよのしそ 明石姫君

かすやれき 玉よりととつり

ちみと 相壺なり

多うたいめい母名 藤雲文院

り母にさうい あり世と事とのけいそ源我

カよふれたやーにのあふ

いけくさきさう 玉よりハおらう

いそきをたれきさう 与折せ儀用

たい人 きたたき

おれとく 船

うーろむさう 玉より

いとや力さう 友より

ありーさ福 友より

くりーくおさう いそ



川のよき交り うめを右近のにお交り  
—まじり

かぢよきたまき かぢよきたまき  
源よりいふまじり 行くまじり  
なりされとそ時えきさうきり  
あさりあ 今日酒飲まきりて行く  
—まじり

うれうせめき いのりけだのころ口酒  
激げぬ ねめき今んあやわね

とらき ぶらき ねめき今んあやわね  
とまきあひきり ねめき今んあやわね

あまうと

野うらひこころ くるふらき  
よかきり

ねめきたまき ねめきたまき  
たくらあハ 夕鳥さうい海うらき

物治まは 雲上よす ねめきたまき  
はくしよあき ねめきたまき

すうおとのあき ねめきたまき  
まきりくさあき ねめきたまき



わらうのきりく

秋を 答さうに け流さう此防殿之

人多きくさうん 又おとに身はまらぬ

とまひさうに 心まらぬさうに

とまひさうに 心まらぬさうに

さうに 由はけの御子に

いひさうに ちさうにさうに

たさうにさうに

いひさうに 六条と九条の程さうに

わらう

右道はたさうに 伯瀬さうに 還向にたさうに

こりさうに 此さうに

みさうに 二条院の程さうに

さうに 六条と九条院の程さうに

さうに

たさうに 此さうに

たさうに 此さうに

たさうに 此さうに

たさうに 此さうに

たさうに 此さうに



こ海々々 河海万葉集及子のり 當時の  
布仙堂の島本 兼友と長きう古長こ  
海々々々

海々々々 長谷寺三日集 兼首尾七

日けりりりり

あつれなき人 玉々々々

まこくまらうせ 以河あくせくう 兼上乃

御々々まはあつ次

御々々あつ 兼上乃御乃く

女名は廿七八 兼上乃八ちり

かの人と 玉々々々

たふとのりりりりり 源足こすりりりりり

ろりやたれり 兼上乃ぬりりりりり

水へあつらり 源北多りりりりり 兼上乃

右近をいりりりりり 兼上乃源乃成心一向まここ

ろり海りりりりり 兼上乃源乃成心一向まここ

海まらりりりりり 兼上乃源乃成心一向まここ

かのたつりりりりり 源の初りりりりり

あまけりりりりり 右近りりりりり

まにあつれ 源乃河



うーのきりねね 源乃河 惣上ハ七世也  
心よりねまーいさくとりくかろう甲まーいさく

うあまきりりー 惣上の河

きりまや 後の河

こまきりりー 右の河

きりめきや 後の河は君とら惣上より

花名は志とら源自梅とらこいり

いそりき海ていせ 右近河

きりりきや ことまきりりやうてのね

くきりりりりりりり 源より

あーいりりりりり 右近の河

いそりにすまゆー 夕魚上乃むまーく成るハ

源ゆりりと右を長うりりりりり

いそりもかこりりり 後の河

うそつとらりりり くのあまきりりりりり

夕魚上乃りりりりり

けりりりりり 花名は志とら源

御せりりり 夕魚院よりむりりりりり

けりりりりり 消息よりりりりり

か乃業はむ 花名は志とら源







てはたゞまゝに  
日嘗のたをみそみえううふ事も世に  
うたうう海なる事いふうう子孫を  
れとく

まゝのまゝ 世の上

まゝのまゝ 中々此御方此より  
あれと皆やつて人のつてまゝの  
うとく

あひれと 祝歌里とあひれと  
かのありの昔 夕日上の事  
よく出たり 世の上の事

ううや 世の上

うのうの 神方の上  
たをたの中も かりあう事

ううの 世の上  
ううの 世の上

あつれとひま 世の上  
あまうの事

ううの 世の上  
明の上



さうともしありし 雲々の御意上も明心工よは

押しきりあさる思給ある

又とてうりうりし け介君の母上るね海の見て

さくさくふいこりうやたしあふさう

すくくくくも 万逢あはさうかさる

あはな海とて 俄落し一羽羽あ

うの人 玉ありの族姓よあさる

十月 一本十月とありしつれもすれ

ひんうーれはさく 花お里へ

あふれとあひり 海の河

女うさうまう 年たけたら今年玉うら

廿二歳之

中将よ 夕霧うさくり中ねとせし

夕霧を御子のこくあつみあふとさ

るまうら人の 花お里河

ふたや 源の河夕息とさう

御のえ 花お里よさくあはれ

はらうく 花お里の河

あふら人の人 源のうさめ人の思

むりひらまう 玉うさくつさくあ



あてらふにち哉乃女のやめいとうらん

ういてるそそ夫 素手なまこなるらん

こゝろさくら 海の家は母うくのねん

けりきく むらゆき

かききくすらん 灯の津波とて流れて

うげかまは法を指す

ねまふか人や 是も念定く高きう

きーころ 海の家

あしは 三田蔵の時よりお中にさうゆ

うく風あひさるね若くともせむさうりゆの

そり河あくのねん

志のねんく 海の家

いさういさう けいあしんさうねん

くふささかさう 雲上あささうねん

あやーのらんや 雲上河さう

海の家 雲上をさうりてし記

てんあいのねんさうらん地代物みはさめ

さうそ ねんあさ

すさうひささせ 海の家

さうげん 海の家さうりてし記



甚次恋ひしる力にたまり 我力にいとふふ  
そらととむらうと大海にのりわにのるあひ  
毎らこころのいさよれあるらん

源乃あまのこむらさき  
ふあおひのなまき

くさきあまのこむらさき  
てのこもはさき

くさきあまのこむらさき  
くさきあまのこむらさき

くさきあまのこむらさき  
くさきあまのこむらさき

くさきあまのこむらさき  
くさきあまのこむらさき

くさきあまのこむらさき  
くさきあまのこむらさき

くさきあまのこむらさき  
くさきあまのこむらさき

くさきあまのこむらさき  
くさきあまのこむらさき



てりしたるを 洞きる事と并らるるにせむ

りしてこまごまうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

まづる事

まづる事 板引又商賈の事と昔はうた

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ

あふにうもきこもきこ



にり方たい 玉ふり

にらわれと 是の字義の四六反より

たるまおしり

地のりらふありあり 玉ふりへの活梅

たろと雲上乃思結とありそくめ結と

うこいあつ物よとそめを急つむ いろふり

かあおろろろ海と

こきう 雲之何海流ちやれり

ゆり色 くるおれ之上古の居も用て振舞

おきり 皆え日乃出せり

あまのいふら 雲上の似させてと結へり

たぬとけりるうと

やまあまのうらき 使此録と

いてわなまつら ぬのり

あまのりりら 奥字之上古とありに

うらうら

浄り起あけきと い録あまりに結まれ

海の浄りまきとありわらわく此結

ちやうに 赤橋乃もこれうねりうら

とめ結り



えつりーらあみ 海のみみこ

う衣 赤猪と磨と云うよおろくさみあふ

ううとくはつそよあふむ事よさう

まあも 海をば歌とく

海とけとまねねや 口はれ人合合の時必

まさけしとらとよまを思之り一は

海とけのこ字さう

あこ人 けしとらとら 事ふあこ人

さうらとれ 歌すく

屋をあか 中乃五文字之

さう川乃さうし 舟枕と名前のあしあ川境

たら草子之毎夜はつとらとら之曰事とら之

ひさうのみこ 在生志の父事

みまこく 海へ返つせねひへ

うくあまい志うなまう 名うれ事うくうくひ他

たまふらうん

いと海あやふく 世の上乃美みれあうり

ひあ君と あむむらこくめねく

長くく女は 走一へ

ひあ君と 又つあそ人とせらとらあう振うと



此よりいふは くの地帯して末猪乃みまゝに給  
へり事ともし思給はらふ也

まゝに給はらふん ぬのぬに寄れあつたを  
しるしにありあつたの事ぬ事とらぢや  
袖にぬじしてとある紙をうらうたまたこ  
らへとらる河打りし流し

まゝに給はらふ くの地帯の給あつて也

くさんぬ くのちとある紙をうらふは乃家

まゝに給はらふとらる紙をうらふは乃家の  
紙に事とらる紙をうらふは乃家の



初書

卷之八の序并河等々因北六歳力正月より  
皇太后の御幸乃卷五月次より  
一々たるるる正月一日に  
このくく之元日迄はな  
六条院と云ふも  
ましていと 六条院之  
したる殿の中なる  
まやちり此ゆきひ  
こりあり是春代  
三限より



海之及教誨の基勅乃銘別の爲よして教  
まねわらね給ふらうとりひまうてまよと  
也よ又春乃たよの所まゝ意よのすう  
かくと暖うりりうてまよと

いま佛 生佛國極樂國也

まよとらうまけて 前乃何いひまよと書  
り對してそり意よ今が基うらぬり  
ねのせりうまうたらふよとらうてうち  
うちもあふらう海やう美望藤ようりを  
又よのまうけくまよとらうまよと  
まよと

ひ水君 明名乃姫君之 年れうらの四年あ  
次今年の中中中うりえよれ威  
い水君うらまぬ 意のうのうね給へん  
たうく思ふらね又刻何けてまよと海の  
仁慈あうひ  
中持君 意よ祀作の人之次乃うららひの時  
世上下御まよとれ海の人之海のうり給へ  
うねうらうけのあまのやめよの山よた  
まよとらうまよとらう君う子とせよ私乃



新ひき一以美神一といへんをいふんは各賀之  
花お里よりよの御く神をいへりてくく  
く子ありうたまふけいこころ人人造園  
也

ふまは口をききむそまうし人 惣上は徳の象  
加美一終つるのさねみ御まふくまうせ給  
へまを

うまは神 徳と惣上と影神うしんとく  
系にせんと都草子地之引りうら

系より之ふ系院の所へ唐大母たりる  
系之竹事につまきくも草子地之源也  
上也の御ありといふ

くまは神のい 元日子也 小乃おと明名上之

姫君乃く美母之 元きくねえく作枝き  
へ一給造の松の上よ鳴る等の都とく初  
音の目とくううううううううううう  
り松子鶯の初子の縁あれは

松もふんあんかりあひる作物うれり鶯も  
ひるてくううううううううううう  
うは御おるそふ年みううの戦面あり



だんころーのせめてらぬ年此初春よきそら  
あまのこめがう人吉の字と経歴の義とあ  
流之経歴の依三統とことし并に今日元  
日まはことし并に今日元日まはあまの催  
とて大いぬを〜経直の所より〜経  
へもあけぬ又をまぬの司統、徳の之  
解り経之、法をえ、海〜くわくひん〜まら  
てま規経直のまふ〜

ひら、りり、れ、り、の、経、〜、の、思、れ、ゆ、〜  
あまのこめがう人吉の字と経歴の義とあ

〜の、思、れ、ゆ、〜  
〜の、思、れ、ゆ、〜  
〜の、思、れ、ゆ、〜  
〜の、思、れ、ゆ、〜

時、ま、ぬ、夏、の、あ、ま、れ、〜、の、思、れ、ゆ、〜  
〜の、思、れ、ゆ、〜  
〜の、思、れ、ゆ、〜  
〜の、思、れ、ゆ、〜

あまのこめがう人吉の字と経歴の義とあ  
〜の、思、れ、ゆ、〜  
〜の、思、れ、ゆ、〜  
〜の、思、れ、ゆ、〜



母よりおつ候之を多々ハさわくうりつ時母  
おたり花鳥母詳之やうに記さるる式  
又あつらふ事にはくまけれとえちとる  
にもほろろの娘くうと徳田孫之  
日れろろん 徳力の半之花鳥里ハ客歌  
美醜麻あは文うこ孫んあつ此之ふよれ  
文うころれく思孫之

御心乃おひら  
もろお孫ん御りらこま文うおこ  
物ろろの物ろり 年内より物物

あのだい 玉鬘乃御心乃まきこり  
年十月よりすも孫んらまこりまも  
決う孫まーの孫ようありくとまおろ  
孫んこ 孫んこ 孫んこ  
也之やまろに うわろりの事 花鳥  
ろりみえろり

物ろのひ 孫んらまに孫孫ひ一  
おそえろろま 孫んらまに孫孫ひ一  
さろろ 孫んらまに孫孫ひ一  
たろ一孫あり 孫んらまに孫孫ひ一



とをむすつて此のめくう記之 海内玉鬘  
上人志望の御子めくうに給へる志望の  
父めくうはなまのめくうとてめくうはれはる  
海この父めくうはなまのめくうとてめくうは  
たつとて 也 此のめくうはなまのめくうは  
也五年よりめくうはなまのめくうはなまのめくうは

はなまのめくうはなまのめくうはなまのめくうは  
なまのめくうはなまのめくうはなまのめくうは  
なまのめくうはなまのめくうはなまのめくうは  
なまのめくうはなまのめくうはなまのめくうは  
なまのめくうはなまのめくうはなまのめくうは

なまのめくうはなまのめくうはなまのめくうは  
なまのめくうはなまのめくうはなまのめくうは

玉鬘の御記

しるはありし事ありし 有る地之志上よりあり

しるはありし事ありし 有る地之志上よりあり

しるはありし事ありし 有る地之志上よりあり

しるはありし事ありし 有る地之志上よりあり

しるはありし事ありし 有る地之志上よりあり

しるはありし事ありし 有る地之志上よりあり

しるはありし事ありし 有る地之志上よりあり

しるはありし事ありし 有る地之志上よりあり

しるはありし事ありし 有る地之志上よりあり



古き世へ今日形勢の御西序と云ふ  
と流るる言と云流るれと云る言あり

静海らおとる御方未解　こきりおとる御方

く又さあささり　く色あつてと云ふこと  
海に梅の花さけるさうなまお　あはれさう

色あつて言の静　ひささく静ありて

いささか　明石と云　和歌のこころ

く　あつて海　くささ　くも　明石上

のつて　あつてあつて　あつて　あつて　あつて

り　色あつて言の静　思ひて

ま　あつて　あつて　あつて　あつて　あつて

花　あつて　あつて　あつて　あつて　あつて

然　あつて　あつて　あつて　あつて　あつて

の　あつて　あつて　あつて　あつて　あつて

ま　あつて

ま　あつて　あつて　あつて　あつて　あつて

時　あつて　あつて　あつて　あつて　あつて

く　あつて　あつて　あつて　あつて　あつて

人　あつて　あつて　あつて　あつて　あつて

この院あつてあつて



院号の事 藤原葉よりなりて其の  
かくつらつと書くことと云ふ院と云ふ也

はね乃やしうと 今迄乃玉書乃玉乃

いふ所らむこ色なれ所は次なり  
花乃香そそふ 梅乃香と云ふは  
てきくに梅と云ふは梅乃香  
と云ふはななり又多ふてうと云ふ梅と  
いふれと云

物名として 意上乃介ハ其文々前より

終

たらまの文 意上乃生佛国母のなり

録乃出さくハ下品下世小書ハハ殿乃  
中にさるるのわくハ前又さるる乃  
此中又劫師乃ハ三不足ありて  
不足と云ハ一ハ不見佛ニ云ハ説法ニ云ハ  
之ハ佛と借書ニ云ハてひん乃  
院 三眼書也 未攝 空蟬 空蟬  
な起乃の 徳之 木こさハ 空蟬之  
こさハ一ハ目也 ちこさハ志乃さくさる乃  
終



人女のまゝり 未瑞人々多し人女もまゝり  
かうとはば枝木志願也 澁枝も村古今考也  
澁乃まゝりまゝりかゝる字よりらて替り  
たゝまゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり  
澁またまゝりまゝり 柳の聲もまゝりまゝり  
まゝりまゝりまゝりまゝり 柳のまゝりまゝり  
まゝりまゝりまゝりまゝり

まゝりまゝりまゝりまゝり

かゝぬのまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり  
御んまゝりまゝり 徳の御んまゝりまゝり

まゝりまゝりまゝりまゝり  
あまれまゝりまゝり

まゝりまゝりまゝりまゝり 徳乃仁怒あまれ也 御ん

まゝりまゝりまゝりまゝり

あまれ 相為まゝりまゝり

煩もまゝりまゝり

まゝりまゝりまゝりまゝり 自思まゝりまゝり

まゝりまゝりまゝりまゝり 二条院也 東の院もまゝり

まゝりまゝりまゝりまゝり 今御もまゝり

御下心の孝陸の君もまゝり



佛のうりに 四あうまはけのまきと 袖をひ

うりまねくうり乃時我御まきとれよかまねて

とあり 松うり鴻 喜にゆ松う浦鶴を

みまねむくふあうあうりもすもりり

むうりり 徳乃河 あうりり 空蟬乃河

あきくはあうり 徳河あきくは思まうせあき

はねあうりり 徳乃河之中河乃宿うりり

いさうりり 徳乃河一徳一 軍陣今あうり

を佛も懺悔一徳一 徳一うきふ色あうり

空蟬乃河の中也まき子乃純伊あうりり

いさうりり 徳乃河一徳一 軍陣徳乃河

あうりり 徳乃河一徳一 思

かうりり 孝陸め君めこれ乃用急を

あれりり 思

うりり 人くはあふ色多 うりりあふ

跟あうりり 徳乃河一徳一 けきあうりり

さうりり 思

いづれをまきあうりり 思乃見て徳乃あき

いせりあうりり 徳乃今天下と崇奉にこれ



孫人ともいふ所らんやとて是れ孫の御ありと  
うとて 男多うう 新儀式 西条折目本  
記持統天皇とて 河海北のうや御説を  
年にある事され今年の御ありと

ふいぬぬい乃の女君 むろりてこまき乃明石姫

君也 三つむまや 木文ハ 宇佐使よりお

たり廿二人役者をばはさひありくゆり驛

み横たうや 白驛と飯驛とい日地くく女

飯子食りとなり所ありて馬あきこり我

細衣こころはあり驛也世俗乃治こすわかとて

い儀たとて云こ 杜子美詩奴とて白飯馬青

白鳥とけくまうり あととて乃 高四子と

うら物六位乃中に五麴塵の袍と

あうら下袴衣と 殿中御 又帝之 内太殿 桐木之 以二人

款頭也

人受けうハ 催り来うとてうこりう舞と

急あきうら、 都ハ盡み色う起とあううとて

かうこ

花別勸こりり 狂言うまう 物よりすこ相云



馬帽子子と存る一弁が持取板志古  
るく超る人

夕霧と夜霧とをいふは  
天曆と時代とをいふは  
中納言也 夕霧也

夕霧と夜霧とをいふは

色水志の女 人の愛女なるは

つねの踏音の後身は

くすくすたる 御さくくすくすたる

いそいで又いそいでに

いてありあり相違なり

さきなるやこれつた

は女系乃津花鳥云

りされと色あり

ありともみし

中納言冷泉院の御物

事あり

け物語のあり

をいふ



胡蝶

卷名以予録之勅名曰年之

やまの

はねよりてきた 新造乃聖年まれの也

かみの里山に 大和世界よりあまねくあふく

時分あれもい前乃海にあらうまをたひ

まことそをみるゑのたよりありま

らや巧もいろしく 山乃木さう 雪消た

る時ふみけきとよ色行てそととくも

思へくとも無御流るせそは絶望あり

さむしたりーりめ 舟乃年之

中喜 秋好之 みのまよりうの 花鳥

はたやとゆりー 紫上乃之 ねくの君海

のちり

はねくくくろくた ね年ー六条院乃中み

今中宮ハキーませともかろくた ころえ

ころりまー南光年ハ便好ー是昔の中

まをやハ名ーに月院乃中みく色たす

はつりりねわね前伊のよつけてみえん年

也



ワのき女房 中まの所々の女房のみまの  
池乃のまのこひのりさう乃町と南地也乃  
あまのいさうこひのりさう

ちいさき山を毎こて乃 中嶋あまのまの  
みまの海さうたる所されも舟まの海  
つれはこひのりさう

ぼり殿 多うきささ さまれりさう  
ままの女房達さうのまの

あまの也

珍頭鷓首ままのまのまのまのまの

ままのまのまのまのまのまのまの  
てまの行ゆまのまのまのまのまの  
山乃あまの中嶋乃のまのまのまの  
とまのまのまのまの

かまのまのまのまの 花を憐す也 倉とまの

文集続序堂々藤架文砌紅藥欄風梅  
け文山吹乃さうの道にまのまのまの  
あまのまのまのまのまのまのまの  
く南地也乃のまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまの



不死乃素いけふ桑院也別母蓬萊うと  
也くはりむくううと

表の目乃 眼前景気うのううと  
行くも海しん里を 武陵乃桃源文あるに  
くくも 卒沅系く 曰くもあるは

目もくもわれわたり親母のあをあるは  
くはるのうの いはりうのくもる莊寂も  
せふ所く 木まの庭 堂上あを果と  
すく 物の所 舞人く  
くくも 表乃志くへあはく 表乃志く

くはくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くはくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くはくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くはくもくもくもくもくもくもくもくもくも

かたりと 律乃なるく ありん  
律乃なるく

中まの物へく 樂乃知る也くはくも

光氏 六桑院の温和なる前ありうと  
堂上乃御版母御子もくはくもくもくもくも  
くはくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くはくもくもくもくもくもくもくもくもくも



むらさき乃おつてらぬあまういなるいさな  
なりや也 ぶしのぬい姫君 むらさき  
てこもまき 夢事之 変えし サシメ、不深ぬい ありし事  
なうしと也 中乃おりのありしつ 堅固  
はるし位も ちりたるあはれとまうた  
ともうらいてぬ人多き 一よりのこと  
愛ハ兄弟なり物とて

内及たわいの代中樹 柏木之 松竹の妻

雲共のまこ ころころ ころころ

きつる所

おゆし色ありし 海まふ いま離乃中はあつて  
うあうとさ、わいのなき、と連て乃孫の  
一 事う也

むらさきの 友と倒れまうと成事 故摺うらう  
さきり名う あふ友乃 筑うたうこ けい  
らぬあまのあまういさうらういそたり 以地居  
まは多しとてあま 一 友たあれの色  
なり 梅らに力と い色成立さうと  
しと也いまこ 遠のゆり けうあお  
中宮此御と 終三月へ 延川志さうと



六月にありき也 定る例あり秋所後程  
也大般若にむす事之 日乃成る也  
東帯之花鳥洗了純直衣ハ宿衣なり  
はきき東帯に日乃成る也之ありき  
海りり終 中条の所之也

たも乃御いふに 徳の若居一終也  
いふに乃御ありき 徳あるれて以申す  
一徳光幸す一まはる 善乃なる也

雲々の所之なり 伏花と一終之  
鳥蝶 舞人之 南乃鳥人 昭日ありき

に再入り乃せ終之 乃乃様 伏花ありき  
ありき乃花也 乃乃のり

鳥蝶乃舞あり 龍又樂をありて終之  
あき海也 あり花洗用し 乃之  
蝶鳥の八人之

敷の中持 夕帯也 花うの 秋夜中条  
秋夜にこそ侍終ふ手う水之 松虫文之  
以蝶とすし水とす之

昨日の女居 昨日乃再々舞する女居也  
花又おきけの蜻蛉折也 嘗のうらうらあり



柳 鶯鳴たるを 鳥乃果りあふ

きりぬきり 鳥の急之蝶の日を樂こ

或流鳥れ急み催されて悔てその急をさ

鳥もなると又以蝶又悔てその蝶もさし

はる水云ふあり不用し 吾の此け中ま

の此け之 け之蝶鳥の急之志る記

一うね さね

秘にさきねへり 我家の梅の如次えみ急め秘

りなまねへり 急もすうぬのひ吹見了

たさの御中り あり一筆水也

こころ色 心ありさうそ 秘急急急急急急

蝶又さうなれて色悔りりたる也

さくれと御ら 急上又中まにすう、さう急

時藤たりう人へ難うあらんうなれらさう文

と色履とあるう人と因へさう中まも

又さハハ急急急急急急急急急急急急急

評と也

海とやう急急急急急急急急急急急急急

の急の急急急急急急急急急急急急急

云まて急急急也



西のため 雲上へ踏登の時よりみろく舟  
うりー船也

梅うら河の舟りやあさくまのふもあへん  
云まのこ子孫さうてきーたいたらあり  
水陸のけねむつーう板あれとくは  
てをんねやま記やのいんもら村ま  
かあつらとくむらうつらつらとくま  
の乃ねくはうらけらまはとくをきーた  
いやうあり といらむらとくま  
うらとくまはとくまはとくまはとくま  
思えぬとくまはとくまはとくまはとくま  
はとくまはとくまはとくまはとくま  
か決こ ちわく 内ふ  
殿乃中將金こけらう びらう可うん  
たくとくまはとくまはとくまはとくま  
志願之 目れたはとくまはとくまはとくま  
乃先弟多小女君はむらひとくまはとくま  
この君も けらとくまはとくまはとくま  
う美乃親母をこけらとくまはとくまはとくま  
恩ふもえやとくまはとくまはとくまはとくま



いふよりけ 源を以てよなれと終身之  
ありとあけきり 夕魚よりいさるとあきせと  
なり

糸久 四月廿三日 ためいさ 西對玉

りりり

あひし事と 玉智勢乃をいふくもりた又あま

三つはもと吹徳乃おし決し 大やうまうし

けり事あし 母のまよわくすり終へ海鏡

まは海の内連枝といひ文う 甚甲いとも

候とんそきくはつひ終んも 好きあはさ

あまの徳母のこそ 終成あし 初集て流

ん乃ち所けりしりやう きは源のく終之

是ころも思あへん 昔の宮をうし 子記ては

誰もさふふそのあへん 女はまみしうんをいさ

むんがれとて 右大将 終思へ 言法なりん

ありりりり 終たりき いうあり 言法し流る

大将を恋の石母うく っ陣まじり 終終み

孔子があの人ありと色い くと之 借み終のつ

またらい 文と伝うて 一 説く 居用

ねふと色 ちりりり 玉智勢の言終りあ



右道ヤ一ツくさるる

女乃教之 孫勝也

我母も志りぬ徳の孫に志る也 又又なき  
けれ 其時ハ 其の思也

りさぬらそ 大されきけに物あやいつ

まぬりあやせらるるれすうおひくはを

くつに危極る事 是れ身内物也きき

ふよらわやくぬぬにせをまつりてを

一たつらうふく 物乃たなりかうたれ

目と又れううにこにふ事まきとらや

ぬ事まきとらやううに也也

う乃流りあらたをきけ 大そをまけらる

衆となつたあつ

要大將 其乃の宮と教黒也 兩人也 形をて

新入らうあつ 一の此乃花れ多 卵花

ふはつとあけみみ終りり 一まきりて右玉

警勇とわみらと久終りて 今ハまきと終り

と人みみかえん 一まきりて右玉

あり 一まきりて 源也 其警勇と年ハ

十三ちういこ 右子向み徳のうみあふん

たぐ思也



こゝに人の御せしうこ 右近が約徳の志り終る  
介の文のきりしれうと 所よりかきしうこ  
こゝに母終ふありたりきん 徳乃きりあり  
終る事のかかよらたれと

いふはきりぬく ありと一たる御使志り終る  
そめそ悔つとていこらうたりき 知らきあり  
いれたらうやうめはありま一らきと 公卿と  
之は 人の競性よと云こ

志りまうらう 二美法也 よめいし思あはしは徳  
る美の兄がされと ころあめやうを也徳

乃玉盤方りの終り

たら次前やありと やま一う やま一ま一や  
ま一うこころと 事一もきき行とらおむは  
らんも強いの志りぬ程みんやま一らとこ  
こころと 終るの父おとめさの継女の御中  
あれと

彼をの人のあつたは 張みと色志る人  
れらもあつてもたみも美又母志りせ中へ  
うこ 美ハのらり こそ誰人よりあつたは  
アハまらぬとあり人 男入と 女入と

大分と字を朝



きつふ ちやめさこのめさきつふに  
さくあるふいと無根の昔のまきうた  
へとせ ちやめさへたる人のみさか平井  
乃ち女物うきう 故母のいさくさくさ  
いふよりちやめさへけいさひの意上のあは  
これの原の力うきうてあつたのち  
うきうの ちやめさへ父文をえさか  
たつたのちやめさへけいさひの年乃  
ちやめさへけいさひの力うきうの思  
ちやめさへけいさひの力うきうの思

所のよりけり ちやめさへけいさひの思  
後乃親の事へ 世俗の事へ

うらまけ ちやめさへけいさひの思  
いふよりちやめさへけいさひの思  
玉髻の源子さくさくさくさくさくさく  
— 文と源の中へ ちやめさへけいさひの思

昔物語 行者の語めさくさくさくさくさくさく

— 事あり

ちやめさへけいさひの思  
ちやめさへけいさひの思  
源のちやめさへけいさひの思



多岐の毛 雲上のつゞは源乃だてしあはれ  
りーまはまーく之終之

うまうー毛 雲上乃をーあうは源へ中終之  
多ありけ 源乃河くうなるりまうの終

物うぬ毛

以中并らす毛 玉盤乃まきれあひあう

いーまはまーく之終之 和して又うー

文集四月 天氣和且清

まのけひ女若 玉盤乃 首折り 夕島上玉佩

中持乃ううに首之後 夕帯の雲上には終りあは

あまのぬね物と名をけうは玉盤乃ハ終りあは

うぬ終乃うう毛

袖乃名代 珠と夕帯上玉佩 終りあは

源のうまうぬくまううう毛之 名あうう

源の初也

こ乃をうぬ 末之持也 水う 源の自の

終之

うーあうう 源のう玉盤乃と思うーはうへ

う一人あううしう物と水 源の自終也 風の折あ

なる水 和且清乃末句也 初為單衣文



体軽い句も同詩の中此句也

海とのわや 前よかか 海の本のわやとて

こゝろはた我思ふとてきりりてとてとて

漁をありかて思ひ給ひしと今又又又

て又とちとちとちとてとて思給へてある

不とつてとてとてとて書かたう妙也

か 杉をた 漁の河也 くら世もれうる 上可の

世乃人のまゝの男もたふなれ給ぬらとて

うけてもむ警方へいまこ志り給ぬとて

告給うとてむ警方への也子也

たかひまうりー 是より父乃詞

くらとてけ 美翁もまらとての也

うけ給りぬ 是よりむ警方の文乃詞也

字の上はけく字に 古田乃松 花鳥説也

形勝

むまのわやとて 美乃父とて思てとて向も

まけまゝむ警方の文もふ思ひされ給へ

いとりの中將 前よかのわやとてとて

とてとてとてとてとて漁力の給へとて

はとてとてとて かにとてとてとて



卷名初并交を以て号せり徳州の蔵育の  
事之由乃并也い海く徳接政一終之  
てそあきく一紀といふくこれと色月本居  
り一毎事ゆりり子紀終之天下を掌  
中ふ力終也三交たより海り徳の河光  
よ三交く一思悔くても也前乃卷あき刃之  
たり 子めのひめ君 徳とてう行事は

たの三終又ツ紙うけ終事の四やま三とあ  
らん保と三吏監きよめたふ又終り一三  
まけせやか三不下終と也如海を三交の  
徳の御子とてうらんも三終一三とと

なふ事と色 三むろく三年と三終三たふ三交

一三とと

たはと三と三ちうめ 三三乃松力三交前め三  
三三

三三三三三三三 三三三三三三三

三三三三三三三三三三三三三三三三三  
乃わと三三三三三三三三三三三三三三三  
三三三三三三三三三三三三三三三三三



愁よりり 五月といひし中花鳥よみ

花よりきりきり、昔の多きなり

人へきりきり、むらりの所かみ文

海へきりきり、河よりきりきり

夕鳥より三任中將乃むききり、其先分宰相より

人のむききり、むらりのいとこより

物よりきりきり、源と昔のいと何事

りきりきり、むらりの道よりいへきり

終つるなげ物の終り、むらりのいと何事

いへきりきり、源乃のいと何事

乃きりきり、むらりのいと何事

ぬへきりきり、むらりのいと何事

昔のなり、むらりのいと何事

うらきりきり、源乃のいと何事

むらりのいと何事、源乃のいと何事

いへきりきり、源乃のいと何事

宰相乃君、宮の御せり、いと何事

いへきりきり、源乃のいと何事

いへきりきり、源乃のいと何事

いへきりきり、源乃のいと何事



あつらひくあくちくひ終ふに成家うとふは  
きくは成家終ふに事よしくはなれとて  
ひびりりあてて むらさきの

えいり終ひぬふ、源の事也 なるれを  
あつらひあめの御返事にあつらひ終也  
堂よりすうきた 花鳥況下終

あつらひ終ひく むらさき

村よりくく光 源のくも終也 終ひ終也  
はまの源乃むらさきく終又すうてくは  
てのくめく乃終ひく かくもく

たうん 源のつと具く終ひく終也

海への 草子池く 実子の明名の事也  
あつらひく終ひく 終ひく 終ひく  
きり 源のゆり終也

宮へのあつらひ 人とも終ひく なるもく  
り 是くつ終ひく 終ひく 終ひく

あつらひ 葉のくも 源の推量にたつ  
ころく 終ひく 鳴事もく 終ひく  
あつらひ 終ひく 終ひく 終ひく

あつらひ 終ひく 終ひく 終ひく



やえそ并珍く  
かきくまじ津もあふく  
雲のひらう梅く見く侍ま  
今うまらう  
たのあふくさおえなる  
たのあふくさおえなる

おとすふ  
ほつれるす  
おとすふ  
おとすふ  
おとすふ

最よ身お給く  
熟いふと  
草子池く

五月雨み物おのり  
時鳥おさく  
物たりのみあ

ふりてさく  
おとすふ  
おとすふ  
おとすふ

母のこころ  
おとすふ  
おとすふ  
おとすふ

志して原の父さ  
おとすふ  
おとすふ  
おとすふ

母さやに  
おとすふ  
おとすふ  
おとすふ

人まぬあり  
今まらう  
源乃金子  
おとすふ



こゝありてはらむつゝいふ事あるわ  
まは人さういふと息絶す ころは極い  
漁乃中りまねくりつゆまをくらたふ又思ふ  
ため結さる也 漁乃そ然めのいせせ

中系 秋ね也

やむこ風すまの 中系ハ聲こまかむ  
ふらりこくふらえー 結らつたて じゆま  
たそに 東系乃所まの 結すむつ  
お終りー 初よ馬場又らうあこ

いふまわ 欠戸のまの事戻回結也 づつづ

い ちまをちりつみ海いせうと 人カ  
んやより 男女のあふひち事あつた也

いけこころい ますよけ君さちよんこを友

ちたつ人ははしらこ結まー 結こ結らか

ー 此の結て又愛りいこくもあつた

あしつらつたきやまの結らの人をわこつら

こそいまのこりー 山の結をさる

は危えきも はやとまのあまあつた教を

理美はあし云うこー つぬれきも約つ

うに結也 漁乃のまを前系くつれがさ



あふふあふんと書してゐるにけり  
葛蒲の常に縁ある物なれと昔より別  
しちがふ所流るこひ人の心をみえ  
流事しとねり事しきこゝむろりのこ  
志あつこゝまを あやめの娘またなりあり  
けり流る 若くもやいふの息あつ事  
もなまふしこゝまをいひのあつこゝま  
世上のよきけりなり

きあつこゝま ながしあも 一雁となつこゝま  
とふのけり 源乃いひとめと とももいひ

之申と也 御いふえいひと水たけり  
あつこゝま けり事しとねりなり あつこゝま  
あやめもりつとえと分る別ふこゝまの  
けりなりとあつこゝまゆり也花鳥者  
けりこゝま ちりつとえとけりこゝま  
あつこゝま けり也 けり海はこゝま  
玉鬘乃りこゝま也  
あつこゝま けり事也  
けりこゝまのちりつとえとけりこゝま  
ひんりこゝまのちりつとえとけりこゝま  
花あ里也 きあつこゝま



夕霧の左進也 人々引つきてまじりて  
さうなまゝ 用意し給ふとあやしく  
こつふらりうめいし給事色 六条院より  
あつちよる人々さうさうのあやも  
まじりあらしり 花鳥里の住居也  
たりの所さ 此れ也 まじり 花鳥  
乃すこ おれやけこたひ一歩公威すまに  
かさむやうさう中此あつちよるさう也  
一歩よめ持り色海 日たすさう花鳥  
説られし可成 えんり 勝方の礼  
都必大勲さうの事也 今もか美茂競  
馬少色ババえんりのあは  
昔のま 源の詞 人々りハ人々り  
まうらと也 今も此の歌のまうら  
あれとこれりまのさうさう也 御さう  
ふしう 源よりハあつちよる 源も源  
けくみし給ふ 昔乃さうさう 花鳥  
里の御さうさうみ給ふせ給ふさうし  
さうのまこ 昔ののまこ 花鳥里つた  
り 昨のま事さうのま給ふ







乃事とたふれぬ花鳥洗御めは  
けあつん不用くあひさうまね花鳥  
ハ我愁よ云う一 源之文婦此同の事  
かより力強なりいられし優あつさう  
のよたにさすり 花鳥也 中とあり  
源よりゆりり強なり

まらぬ 又月雨之 つまあつぬり  
まらぬ 又月雨之 つまあつぬり  
まらぬ 又月雨之 つまあつぬり  
まらぬ 又月雨之 つまあつぬり  
まらぬ 又月雨之 つまあつぬり

花鳥之毒 一あり其時  
ひやもきさる人しと かくしり人  
おとろくしとまね初  
かろ物とを 名り物語繪あり こと  
まらぬ 又月雨之 つまあつぬり  
まらぬ 又月雨之 つまあつぬり  
まらぬ 又月雨之 つまあつぬり  
まらぬ 又月雨之 つまあつぬり  
まらぬ 又月雨之 つまあつぬり



らうだけなり かりし物語よき此事あるは  
侍り非君方の侍りなりや此いふむら  
の之 ざんふとはさるるるるの侍り  
也之 志のりなり又さくしよなり

二言ともしよあはしらすれと思し事也  
まらうらみりあつ奥あつ事とたり事あり  
さしあし なるれ物語さといさるるなり  
少のさるれく 守りまらうりさるる

は下むらうの刻 今侍りん 源さる  
徳とさるれたる人さるるり侍りあり  
さしあし 推量し 終り

こらあし 皆さる事さるる物語各骨より  
さしてさるるる也 源乃程授しるれ  
也さるるるのさるる 源の初よりさる  
堂式は物語と作せり 大言詞あけて  
より 莊子宮言なり 室言者此也言  
借他人さるる言也と作せり

さしあし 源まらるる 源さるるさるる  
さしあし 源まらるる 源さるるさるる  
さしあし 源まらるる 源さるるさるる  
さしあし 源まらるる 源さるるさるる



流なりやう　　さへいそく一か所えいり  
やうさう水ありいづれ母と色を煩之日  
かと塵との才学ハ文章にききよる  
乃流なりやうこころれ流釣のハ物也代時  
也あつ志うへ

あま　　やま　　文所古今にらる事も異朝  
か朝乃作急又うめらあく漢次う  
あまきれ一向母さうにこあうまうらこ  
寔を繪物さうしたまけての流こ  
いとけりいとこころり　　は流やまらさこ流り

され教又あそとみる之法抄みみえうり  
あまうへにそと乃れ流と昂時みりう  
はへらことそまら流教とそき流りこ  
さう會んといふ事ありて是別男等之流初  
より大流と流終事佛乃か急流と流  
生乃辨いさうされらまら大流流りて流  
教と流終なり　　其中又何合一向小流之  
さうりまらよのハいまこ流生乃起流熟せら  
時心教乃大小とさうて流も定け時り昔  
代さうりあそ今乃流りてそええらるあ







也

むらりありて 堂上の昔代事と書きて

終

まのうれために 堂上よる居る母を養  
ふたを自稱し終へるにたのむ  
うぬ 弟を絶く又の堂上の印之こあ  
いめたまふり とう弟をとも事よ又源の  
とありめ終事之 此女君 源乃河ため  
御之 むらり此う終く悔ふの此む  
其名は此のつひのあり 此の思終る也

うら乃ありて 花名みみなりあま  
此人はに色をいそめ 此はなり  
これもあるりありて 此のあま  
ふめりなりすくあり也 ころた  
今現在乃るもくありて 此に  
此の事なり 此の事なり  
此の字を讀む 此の事なり  
此の事なり 中庸をた  
此の事なり 此の事なり  
此の事なり 此の事なり  
此の事なり 此の事なり



事の色をこれとて曲もなれず也  
事にかとてまゝそなたの心は  
おのれにさしとてまゝそなたの心は  
おのれにさしとてまゝそなたの心は  
おのれにさしとてまゝそなたの心は  
おのれにさしとてまゝそなたの心は  
おのれにさしとてまゝそなたの心は  
おのれにさしとてまゝそなたの心は

中將乃君夕暮方 此形よの雲上の野意  
花鳥説い  
除あつた  
花鳥説い  
中將乃君夕暮方 此形よの雲上の野意  
花鳥説い  
除あつた  
花鳥説い  
中將乃君夕暮方 此形よの雲上の野意  
花鳥説い  
除あつた  
花鳥説い  
中將乃君夕暮方 此形よの雲上の野意  
花鳥説い  
除あつた  
花鳥説い







常夏

以予為卷為豎乃并之 源氏公乃夏之

以也あつる日 中将乃君 夕露也

あつるき 殿上人 六条院家日之

あつる 栲川也以門禁野と云くは禁野也

あつるあつる 加美哉川也 時乃原地と云く

あつるあつる 栲木と云く

あつるあつる 栲木と云く 今乃世也

あつるあつる 栲木と云く

あつるあつる 栲木と云く

風ハ吹く 夏乃原氣面白く

水乃あつるあつる 源氏公乃あつる

あつるあつる 源氏公乃あつる

暑小くあつる也 殿内生微涼乃あつる

あつるあつる 源氏公乃あつる

あつるあつる 源氏公乃あつる

あつるあつる

あつるあつる 源氏公乃あつる

あつるあつる 源氏公乃あつる

あつるあつる 源氏公乃あつる



ありき乃多之 物能たの鯨之嗜  
編録したつて 年を人ぬる 落胤  
勝多ありあつた人か控あつた 海とあ  
りり こそいふ海となつた也 活るて 國守  
いふたわらうあつ 漁の初之き色内大屋の街  
子と色あまこ 侍る物とも也

なつたり 先ずかたうこよつたり かつた  
きつり אהוריに申さるる也

は初穂乃老者まろり 乃申にありいひま  
色合負たつたといとさり 漁の街子

乃長くあつた也 名ありも地つた城力  
まろり 色あつたりあつた人なれりいひる  
人申交らといとさり かつた 田舎屋もろり  
こころあつたり申もあつたり 也ろこきこ  
くさぬぬ水よなろり 版あつたまろり申  
あつた 色あつた也 かつた 月も濁るる  
り 八穀 かつた 色あつた也

中納乃君 花鳥 夕暮と云い いろ是れ  
栢木之び申栢木 葉皆さうしらて 志あつた  
色あつた 八年か持よろり 申さるる



なり

くうーとまきうつる 源乃此事女子細く  
きうまうふあふ極本にこそあるは  
こた也か持と有侍候こまうみなり  
皆連枝とあけと云の朝臣也 夕暮候こ  
して乃孫之雲村一層まのさうひち事と  
口村ーと思孫あふ

あまーかうー 日大臣乃清子と云はういとこ  
ろりー孫 朝臣也 名うの事 源と日大臣

との清あふ也

かくらう孫まつまを 近江乃君神尋初孫  
事とつ孫又のまうむううとまをえ後  
つうてふまわらま也 一とてまをえま各  
初乃まをいぬおらうー 日大臣乃事  
なり 一あり人乃乃台熟乃事  
め乃ある人  
れぬぬまはまうー 一白う志うせさう  
たさま  
あまひく むらうと日乃れとにまを  
まうらうとあるまにりえあてかく  
ま



まゝに八段の乃を魚とすはたせしむ  
海つらん也。源の男中

のやまぐさちやま弁 源の御 弁のたより

玉鬘芳津とこ ねとひ女君と おまじと穰

ころりての場へ 也そへおれへと

志のひて ころ志のひて源の御

か持侍哉 二れなり源の御

中乃 夕暮乃を法よとより 源下とて

ころの人とく急乃中なる旅ゆりく具  
御常の事也

とくくしね ころ冠と事と色人のあ

いふまのひならに先へとけりとは 福のあ

りひんく乃の代冠と色替へら、おとより

うまより也やみ文とらよりて 殿と人

まやせとこ夏乃事と 玉よりあしと

やう

い梅そく 源の御と 玉よりより八段のあ

まゝにあらと

右乃中将 梅木也 いろふとやをとらせ

若りらる乃より代故ぬ公より六と







こ乃乃と 和琴うよとり 琴くたあうひ物乃  
きくたあうひ物乃名物末とゆてあふ家  
地之やまをこそ 皆或を高座靡りる  
こー乃樂器多也 こと乃乃女乃乃  
多めあし こそたう物と也

物乃心にくうあをせて昔へ和琴よも樂  
うあひせし之近代たうこ端さるこ  
乃乃のとき 和琴ハ琴文とあこしくさあこ  
梅ううすハあき物とこ 乃のこ  
むらりハらもの場終こ

さうわらう清あまの 乃乃乃代のこ 乃乃乃乃  
ひうい終終さうすもあふんりさこ

あやう山乃 誰色ひくくハあまの終  
さこれさうハあうりさうと也 けり

源乃詞

名もたらうさうり あやハ山乃乃交とさ  
かきさう乃中ひさうやうたさこ くれあめ  
おやと和琴乃乃乃とさうとさう也  
こい交も けりさうあさうさうぬへらなあさ  
ひ乃乃乃乃とありはる也 若さるるこ



て朽くまは ことまふまてふ御打りまは別  
子に事ありかとうと也

ふとつし 源方ううまじし 子孫とさうらふ  
こつたさす也いりぬふくうさ福こ  
これまきまされる 今海のひうにたなみ  
まきに先さう悔さすいさあへんえ  
水思ひぬし わきりぬ やうなまえける  
かうの時またりし 悔さ上りたつさき  
こゆさよさう

朽やうさつり 二等あり源乃内太厚とす

子孫とさう 又乃芽へ源と朽や此聲に  
むらさき乃し 子にころ神言

まふ人又まんとらぬ 初藤能人今まら  
ていさうかうたさう 也くのまをへん

わきまきこく とも子孫とさう  
子孫とさう 子にたまきさ合養

物つわらさき ちる宮文との女此たえ  
志りもひさし 子にま 此うさ乃源と今

ちとあさうりしたまこと 見つらあぬ  
あかめくきと 子にあとし 源乃神



終末法此事よらるる色に於て公言  
又て一河まゝ又まゝ一事といふをば  
むらゝ此事よらるる

此つぬまゝ、世らまゝあまゝ、おられぬ也  
いふへ色 毎尺乃地活事

此中あまれまゝ、夕島よまおしおたり  
又て一このむらゝ此まゝ一也  
目右尾へ中終つ夕歌上の行と尋お終  
はるるりてりつりるまゝと也  
まのこり色とせらむと也

山崎乃 神方よ色世よま 早下一たるこ  
こまゝまゝ一六 引まゝ未勸の只今家所お  
あゝはらる一ことと色 夕終まゝと也

たこの清一このこ 高く又思あ一終つて  
善乃上 雲上こ こそらるめおたり皆  
くたまみまゝ一八曲あらまゝ一と也

まゝりてたれ也 昔の事 大将まゝあを  
まゝり行あひとゝ也 花鳥説い  
まゝ又説いてまゝ 幸太物とむこととてむ  
くもゝとゝとゝ也 園より伝はるる也



まゝにひらきたるふらふらふらふら  
おのりもまた 行くて山名を海を山志け  
まやわりの入うらうらうらうら

いせきしうね 茶あめ地こ  
い海乃津むまめ 近江君こ ちうし守家

おのりけたらうらうらうら  
お持乃このつそよ 海乃四郎うらうら

のうらうら

こゝろ 是らうらうら 内太右乃 詞おのりうらうら  
たいうら むらうらうら 内太右乃 詞おのりうらうら

大さよふあうまうらうら  
いてそれらあうらうら 内太右乃 詞おのりうらうら

おとさうらうら 君色うらうら  
おもたうらうら 忠上乃 津腹之 ねらうらうら

まうらうら 源中は名うらうら 津子乃 まうら  
まきこらうら 海ひめ君へ むらうらうら

まうらうら 志保うらうら  
おのりも君乃 津事 雲行 鷹之

うらうら 津乃 津事 又うらうら 成うらうら  
うらうら 津乃 津事 又うらうら 成うらうら



甲子年色紙く 空井石乃所之と云う

孫也

あつちやきり 日之居く くらねん

ちーちううーねんといひむす事

女乃方とつねよ ちーへせつげんく

うー乃人ふ色 現在乃人ふ色とむす事

ちや神さう人ちうなるよーと

才之れぬ明石乃姫君也 かあくーき

何事色ねんやうーき事文うこ

こ乃君代明石乃姫君也おのゝるに雲行

為よちむひて乃取こ ねん

たたふ 夕暮乃事ぬ 喜喜入今事ぬ

思きたるえ ころるに 孫ん此

夕暮乃事今此又人子 っはい道はぬ

ちひらひらうと

昔なふとる色 昔ん行乃分列色文うり

今なるうーと色おらうく ちうりき

わくの取のれな方うく此取くるこ

れとこあるあたい乃い海きき 近江君なり

下遊に志乃事とけり 女所入るよ



弘徽殿乃女所也 亦やうと所乃亦必  
るる 中将きよの 栞本きよのぬてい  
多うい人なるふん 思ひひりたる  
かうなるくーさうさうとあて 赤い魚  
顔かきかきやうき 皆さうくうりめ  
あふふふふふふふ 何事さうらう  
ふふふふふふ 洗い

この所ありさぬ 女所の中 中將乃いといふ  
所へやさうして 栞本きよ乃婦子  
母は遠慮さうてむさうなる

さうさうとさうさうさう 中將きよ  
あまのかりの侍きんとあつたさう  
をさこのぬさたなり 此所にて 近江君の  
さうさうさうさうさう 五世さう 近江君  
乃伊ひの娘人としてさう いかさうさう  
妻皆物語乃ぬさ

さうさうさうさうさう ありて乃  
さうさう 又さう乃君也 所さうさうさう  
さうさうさうさうさう 又さうさうさう







昔やうの事しへたかきと御衣御衣に  
おかしきと御衣御衣おかしき  
うらやま  
うらやま

口を伝也

あまの事し 近江君之 女よりし 近江

團りあり

あまの あまよりたりたり言也地方をさる  
来よりたりたり 福たらの 侍あり

いそこの志ことさ 口を伝威也

女御さるに 口を伝乃刻 ころの

女御乃ホ里よま 梅花時まより

ころい 口を伝乃ま 近江君刻

いそこの志 口を伝乃

いそ志うたりとらて 口を伝乃刻水

刻神さけて薪のころの刻とを

かのあまのよ名とらとら刻と

之をさるにをこのりのあま

ねやろきあの人 口を伝乃ま

いそ志うたりとらて 口を伝乃

水道は君へ行とをわたり



わたり給ふ くらひはまをとおぼつるこ

よき心位又位 日下乃信奉之 あまり

こころしく 是ハ近江君乃所たあまは

あまりに色ふあつても

よろしきあや くれおとあつてもく

くとも色よくあ いくか色よくあ

似あひねへるあまうりあまうりあ

さうせ

まめの君乃 近江乃君嗣 ことれるゆ

いふ曹此律とつりつしつては

くらうくみこたに ことる異に ね

君天下小 日下乃あつて

乃連板とちんさるれ

あうき乃 是よりみ乃嗣引

きり皆略こむうの

あやのあうけ

只手は乃向と

おふらたれ

後にとたり



下女也 ことたりハ 女御乃水廻

之也此類 事乃事之 思て こと清也

事よ事 事れや也 可く 記事たも事

と之れおれや也 中現る乃君乃中御

ちの記事 事れ初之 ありや也 ありや

うけたり 此もなる 四ヶ國御事也

是かよ也 云所詮とせり 是の事乃事也

あまうそ 女御水廻也 悔も 女御乃事

事くると 魚あひとく ありや也 ありや

是之れハ 人中人 中御乃御事也

人分別 事人 事水廻

ま こと ありや 以 事 公事 事 事

事 ありや 事 事 事 事 事 事

御 ありや 事 ありや

事 ありや 事 ありや



渡部



